2007 年度　早稲田大学商学部卒業論文

「大相撲」存続のカギ

― フィールドワークによる影の功労者の潜在的機能分析―

井上達彦ゼミナール第 4 期

小峰　由美子

飛渡　久美子

古田　恵理子

概要書

本論文は、江戸時代中期に確立されてから、およそ 250 年もの間基本的な姿を変えずに存在している日本最古のプロスポーツであり、さらには１つの伝統文化産業とも言える「大相撲」の存続の鍵を解き明かすことを目的としている。

我々は角界の構成から「相撲部屋」が角界の基となる重要な役割を果たしていると考え、部屋に焦点を当てて研究を進めていくことにした。またその際、組織マネジメントにおいて人が重要であるということから「部屋」の人のマネジメントに注目し、部屋が維持出来ている理由を明確にしていった。

研究方法として、文献など紙面の情報のみだけではなく、実際に部屋を訪れ力士にインタビューしたり、相撲協会の広報の方々の協力を得て実際の生の声を収集し、自身の見解を深めていった。

インタビューを進めていくと、各部屋には２タイプの力士が存在することが分かった。２タイプの力士とはすなわち、角界を盛り上げる番付が上位の幕内力士と、その彼らを雑務を通じて支えている番付が下位の幕下力士である。角界は一見すると横綱・大関など名の知れ渡った幕内力士ばかりに目がいってしまいがちだが、実は目立ちがちである彼らよりも他方のタイプの力士の存在が部屋の運営、存続に関して重要であったのだ。

そこで我々は幕下力士に注目し、さらに研究を進めていった。すると、幕下力士の中にも通常のスポーツ界では存在しえない「古参力士」という力士の存在が浮き彫りになった。この「古参力士」は独自の役割を担っていた。彼らならではの役割とは、「おごりをださせない役割」「雑務を担う役割」「他の力士のモチベーションを下げさせず、保つ役割」である。また、彼らは「集団生活」「擬似家族化」「解雇がない」という角界独自の慣習があるこそ居続けられるということも分かった。

角界独自の慣習が生み出す「古参力士」の存在、さらにはその彼らが果たす「古参力士」ならではの役割こそが部屋の運営、存続、しいては角界の存続に重要な影響を果たしているということが明らかになった。

筆者らの知る限り、角界の内部について明らかにする論文には限りがある。それだけに、フィールドワークに基づいた本研究は斬新であり、それだけでも存在意義があるといえよう。また、この論文によって多くの人が「大相撲」に興味を持ってくれると筆者にとって幸せである。

目次

概要書 ……2
目次 ……3

1. 問題意識と調査目的 ……4
　(1) 問題意識
　(2) 調査目的
2. 相撲界とは ……5
　(1) メインプレイヤーその関係性
　(2) 角界の基となる相撲部屋
3. 研究課題 ……7
4. 調査対象と研究方法 ……8
5. 調査結果 ……8
　(1) 相撲部屋についての詳細な知識・考察
　(2) 部屋の運営を円滑に維持する要因
　　ⅰ：幕下（取的力士）の役割
　　ⅱ：古参力士の存在
　(3) 古参力士が存在できる理由
　(4) 相撲部屋における古参力士ならではの役割
　　ⅰ：おごりを出させない役割
　　ⅱ：雑用指導・マネージメントの面で部屋の運営を支える役割
　　ⅲ：他の力士のモチベーションを上げさせる役割
　(5) 古参力士の存在が「部屋の維持」につながる理由についての考察
6. まとめ ……17
7. あとがき ……17
参考文献 ……18
Appendix ……20
Photo Album ……25

1．問題意識と調査目的

(1)　問題意識

近年、朝青龍問題[1]や時津風部屋事件[2]、力士になるための新弟子検査を受ける人がゼロになったなど、相撲界がメディアを騒がせている。また、去年(2007 年)はそういったことからも「相撲界（以下角界)」の転換期とされ、存続が危ぶまれた年とされていた。

そんな中、我々は現在まで何故「角界」という独特の世界が守られ、「相撲」という競技が長く国技として続いているのかという疑問を抱いた。サッカーや野球のように世界大会があるわけでもなく、競技人口もそれほど多くない。現に、中・高等学校で「相撲」が部活としてあるところは少ない。それにもかかわらず、なぜ「角界」は廃れることなく、変わることなく続いてきたのだろうか。

ではここで、大相撲の基本的な形態を見てみよう。現在の大相撲の形は江戸時代中期に確立されたもの[3]である。すなわち大相撲はおよそ 250 年もの間基本的な姿を変えずに存在している日本最古のプロスポーツであり、伝統文化産業の一つであると言える。現在でも、本場所中に両国を訪れると、大銀杏の髷を結い、付き人を従えて袴姿で闊歩する関取[4]や、風呂敷包みを持ちながら国技館へ向かう取的[5]、また、取的の関取に対する深い挨拶などを垣間見ることができ、長い間保たれてきたある種独特な雰囲気を味わうことができる。では一体大相撲がなぜこれまで維持、存続してきたのであろうか。そこには、「国技」だからという一言では言い切れないなにか理由があるのではないかと思い、研究に着手することとした。

そこでまず、同じように独特な世界を維持し、守ってきた「京都の花街」（西尾,2007）の先行研究を参考に、研究を進めることとした。例えば「花街」論文では、一見さんお断り、人材キャリア形成、情報共有のしくみが「京都の花街」を守っていく上で欠かせないルールであり、また、「御茶屋のお母さん」が「京都の花街」を守っていく上で欠かせない重要な人物として書かれていた。そこで、我々は「角界」の維持にも、「京都の花街」と同じような存続を支えるルール（加護野，2005）やキーマンが存在するのではないかと考えた。

---

[1]　朝青龍の横綱史上初の反則負けや休場中の不適切な行動などから、横綱の品格や角界の伝統崩壊が問われた事件。

[2]　部屋の新人力士が稽古中に急死した事件。部屋での暴行が死因であることが判明、暴行の事実を隠蔽したことから角界の閉鎖性や「かわいがり」の意味が問われた事件。

[3]　18 世紀中頃神社への勧進目的から営利目的へ。それを主催するのが相撲会所いまの日本相撲協会にあたる。

[4]　十両以上の力士。横綱・大関・関脇・小結・平幕・十両がこれに当たる。

[5]　幕下以下の力士。幕下、三段目、序二段、序ノ口がこれに当たる。

(2)　調査目的

本論の目的は、「何故角界はこんなにも長い間姿を変えず、存続することができたのであろうか。」という我々の抱いた疑問を解消する為に、「京都の花街」のレビューを参考に角界存続の鍵となるキーマンやルールを解き明かすことである。

2.　相撲界とは

(1)　メインプレーヤーとその関係性

角界は相撲部屋[6]、財団法人日本相撲協会[7]、相撲茶屋[8]、後援会・タニマチ[9]と４つのメインプレイヤーから成り立っており、資金面において各プレイヤー同士に関係性を見出だすことができる。（図１参照）

まず、角界の資金の流れを見ていく。部屋では集団生活をしながら、力士を育成し、相撲を取らせる。部屋に力士を育成させるために、協会は、補助金制度を設け部屋に出資している。また一方、相撲部屋は協会に理事や協会員を選出し、そこで選出された理事たちが大相撲の運営や力士の番付を決めるなどの仕事を行うのであるが、彼らの給与も協会が支給する。それら補助金・給与の資金源となっているのは、協会が挙行している大相撲の興行収入である。

しかしながら、興行収入源である大相撲のチケットを販売しているのは、協会ではない。そのチケットを顧客に販売し、サービスを提供して興行を成り立たせているのは茶屋である。一見すると部屋と茶屋に直接的な関係が見られないように思われるが、茶屋が協会から卸したチケット代が協会を経由して部屋に補助金として流れるため、間接的ではあるが部屋と関係性があると考えられる。

また、部屋の力士育成に関して、協会からの補助金だけでは不十分であり、そこで重要になってくるのが後援会やタニマチの存在である。後援会やタニマチは物資面で直接的に部屋を援助しており、その代償として部屋は後援会員を祝賀会に招いたり、茶屋から譲り受けた桝席に招待したりするといった特典を与えている。

以上より改めてメインプレーヤーの関係性を考えてみる。部屋と協会は協会が部屋に補助金制度を設け、育成費を支給し、直接的に関係を築き部屋を支援する関係である。この育成費の元となるのは、茶屋のチケット販売による興行収入であり、この点から部屋と茶屋

---

[6] 部屋は、集団生活を通じて角界の重要な人物である力士を育成する場所である。（詳しくはAppendix参照。）

[7] 協会は大相撲という興行を挙行する組織である。（詳しくはAppendix参照。）

[8] 茶屋は大相撲のチケットを扱うプレイガイドである。（詳しくはAppendix参照。）

[9] 後援会・タニマチはほぼ無償で部屋に所属する力士たちに物資や資金等で援助する組織である。（詳しくはAppendix参照。）

とは間接的に部屋を支援している関係が伺える。さらに、後援会・タニマチは部屋の力士を直接的に物資面で支援し、部屋はその返礼として特典を与えるというように、部屋と後援会・タニマチの両者は相互にインセンティブを与え合う関係を築いている。ゆえに、直接的もしくは間接的ではあるが、各メインプレーヤーは部屋を支援し支え、そしてそれに対して部屋は何らかの代償を与えるという相互関係が見えてくる。それはやはり、興行を成り立たせる為に必要不可欠な力士の育成場所となる部屋が角界において最も重要なプレーヤーであるからだと我々は考えた。部屋で観客を魅了する力士を育成することは、興行を成り立たせて茶屋に利益をもたらすだけでなく、協会や部屋、はたまた角界全体の財政状況を豊かにする。そのため、部屋を原動力に協会・茶屋にカネを循環させる関係が構築されていると言える。

このように資金面から各メインプレーヤーとの関係を見てみると部屋が角界において重要なポジションに位置していることが分かった。

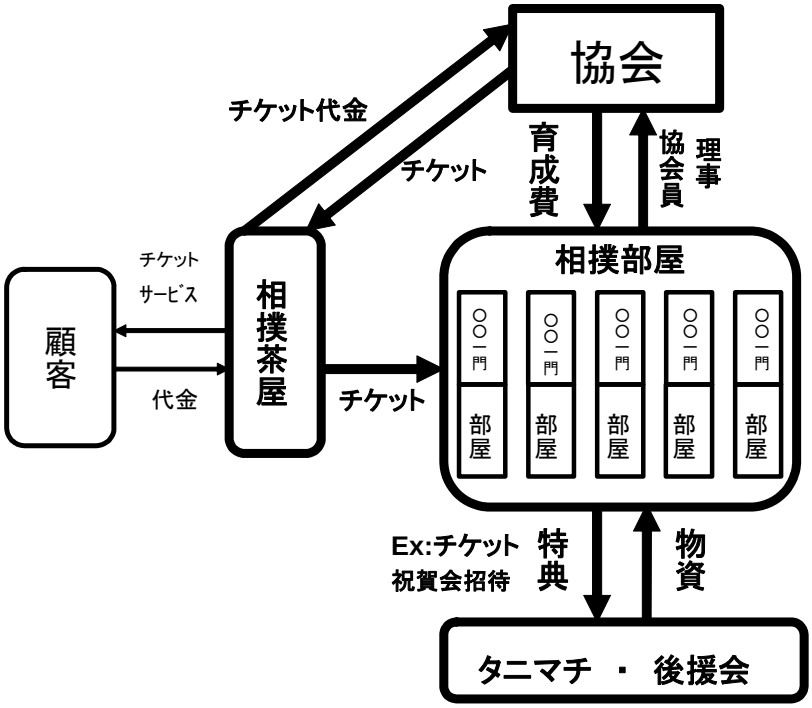


図１　角界のプレイヤーの相互関係

(2)　角界の基となる相撲部屋

それでは、なぜ各界は部屋に資金が集まる仕組みになっているのであろうか。

本来相撲の興行とは土俵で戦う力士の存在がないと成り立たない。力士が土俵で戦い続け、観客を魅了するからこそ相撲という興行が成り立ち、角界という世界が維持できてい

るのである。また、その力士を育成・教育している場所は相撲部屋である。その力士の教育、育成には多大な費用がかかる為、部屋にお金が集まる仕組みになっているのである。

そこで、我々は角界の維持には部屋が維持され続けることが重要であると考え、相撲部屋制度の維持というものこそ角界存続の鍵となるため、以下部屋に注目してさらに角界存続の鍵とは何か、研究を進め明らかにしていきたい。

3. 研究課題

ここでは角界の存続の理由を「部屋」に焦点を当て、解き明かしていく。繰り返しになるが、我々はモノ・カネの流れさらには、力士あっての角界という考えより、角界は部屋を中心に、部屋を基として構成されていると考えた。部屋は角界において必要不可欠な構成要素なのである。想像してみれば分かるだろう。茶屋がなくなってもぴあ等のプレイガイドとなる代わりはいるし、そもそも協会員は部屋に所属する人々で構成されているため、部屋に人が存在しないと協会も存在しえない。

ゆえに角界が存続・維持出来ているということは、各相撲部屋が慣習等を変えずに維持、存続し続けているということであると考え、さらに、各相撲部屋が維持できているのは、代々その部屋らしさを失うことなく、上手く運営できているからであると考えた。

では何故各相撲部屋は代々変わることなく、上手く運営し、維持することができるのであろうか。もちろん制度やお金の流れというのも重要ではあるが、「経営学」という視点に立つと組織や人のマネジメントにも注目する必要がある。

そこで我々は角界の存続の理由を「部屋」に焦点を当て、その「部屋」の人のマネジメントに注目し、部屋が維持出来ている理由を明確にしていく。

4. 研究方法と調査対象

本論文ではフィールドワークから集められたデータを元に、機能分析（Merton, 1949）を行う。ここで、機能は、プラスの作用を及ぼす順機能と、マイナスの作用を及ぼす逆機能に分けることが出来る。そして、それぞれ、当事者が意識している顕在的な機能と、あまり意識されていない潜在的な機能があると。この２軸から、機能は、①顕在的順機能、②顕在的逆機能、③潜在的順機能、④潜在的逆機能にわけることができる。

	顕在的	潜在的
順機能	顕在的順機能	潜在的順機能
逆機能	潜在的逆機能	潜在的逆機能

図２　機能の４分類

加護野（1988）は、「顕在機能とはある行為あるいは制度にたいしていだく主観的な意味であり、潜在機能とは、その社会的行為や制度がもつ客観的な**『意図せざる気づかれない結果』**である」という。そして、当事者や一般社会が認識していないような潜在的な機能や役割を解き明かすことに、調査の価値や醍醐味があると言われているのである。

そこで我々は、部屋の内部関係者、すなわち力士へのインタビュー、また相撲部屋と最も関係が深いと考えられる相撲協会の関係者の方々へのインタビューを通じて、当事者があまり意識していない潜在的な順機能や逆機能を浮き彫りにして、大相撲の存続について議論していきたい。

なお、この双方の調査には、街頭インタビュー調査も行ったため、数十人以上の調査協力者がいるが、この中で主要情報提供者は以下の４人である。

なお、主要情報提供者の年齢や相撲歴等は調査当時のものである。

力士　　A さん（27 才　相撲歴４年　最高位　幕下６枚目）
力士　　B さん（19 才　相撲歴１年　最高位　三段目）
相撲協会関係者　C さん（広報担当、業務歴 11 年）
相撲協会関係者　D さん（広報担当　元大関・現親方　相撲歴 30 年）

力士に対するインタビューは朝稽古の後に、力士達が外でテーピングを外す際の数十分の時間を用いて行われた。この時間は一般の人と力士達がコミュニケーションをとることが出来る大変貴重な時間である。力士の方々は稽古を終え、気さくに答えて下さった。

一方、相撲協会の方々にはあらかじめアポイントメントを取り、インタビューを敢行した。インタビューの際の質問事項はあらかじめ我々で考えておき、場合によっては主要情報提供者の話に合わせて臨機応変に自由に聞き取りを行う半構造化インタビューという形をとった。インタビューの始めには必ず、我々が得た情報は調査以外には使用しないことを口頭で伝えた上でインタビューを行った。

また、どちらの場合も音声での録音が許されなかった為、我々はメモを基にまとめていった。

5. 調査結果

(1) 相撲部屋についての詳細な知識・考察

まず、部屋の構成要員を見ていく。部屋は年寄株を取得した親方と妻であるおかみさん、そして力士から成る。親方は稽古を指導するのはもちろん、部屋での礼儀も厳しく教育するという。その厳しさや、稽古のきつさからくる精神的苦痛をサポートするのがおかみさんの役割である。

次に力士の生活の基盤となる部屋の造りについて述べる。相撲部屋はたいてい１つの家の中に設けられている。その１階に稽古場が設置され、２階には部屋が数個あり力士が睡眠をとるなど稽古以外の時間の生活する場所となっている。ちなみに、たいてい１階稽古場外には倉庫があり、そこにまわしなど稽古で用いられる道具が納められていた。力士は部屋に入門以降は、この１つ屋根の下で稽古はもちろんのこと、衣食住をも共にし「集団生活」を送っていくのである。

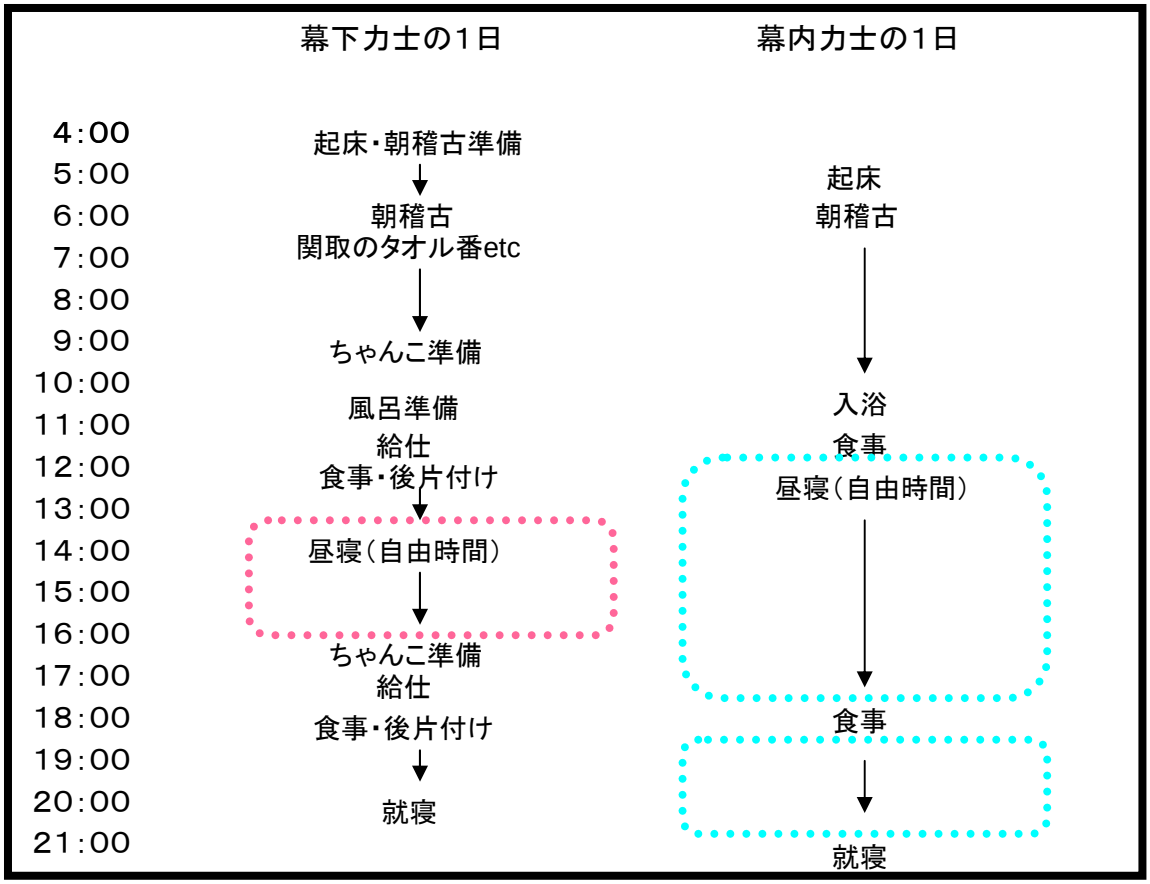
ではこの相撲部屋の「集団生活」とはどのように営まれているのだろうか。インタビューを進めていく上で我々は幕下力士と幕内力士とで生活のパターンが異なることを見つけた。幕内・幕下それぞれの一日を比較したものが以下の表 1[10]である。（なお、図中で自由時間を比較しやすくするために点線で囲っておいた）。

このように幕下力士と幕内力士の１日の生活のパターンが大きく違い、さらには自由時間に大差が生じてしまうのは、生活をする上で必要な雑務のほとんどを幕下の力士が行うことになっているからであるという。

そもそも、相撲部屋の生活において必要な雑務は全て内部の力士で執り行っている。決して外部に委託することはないようだ。けれども部屋の目標である番付の強い力士を輩出するには、幕内力士もしくは幕下でも上位の力士達がより質のよい練習をし、より洗練された体を作り上げることが必要である。そんな幕内力士たちが雑務をも執り行っていたら、休む暇もなく稽古に励むこととなり、稽古に専念できなくなってしまう。それゆえ目標実現のため、雑務をとり行い部屋を支えているのが、幕下力士なのである。稽古を見学していても回しの色が幕内力士は白、幕下力士は黒と幕内と幕下の違いは一目瞭然だった。部屋では幕内と幕下力士の扱いはかなり異なるようである。雑務を執り行うため、幕下力士自身の自由な時間は１日の中でたったの２時間程度しかないそうだ。

[10] A力士へのヒアリングに基づき筆者が作成。

表１　力士の１日のスケジュール



さらに、部屋には入門年数による「年功序列」が働いており、確固たる上下関係が築かれている。入門年数が自分より上の力士を「兄弟子」と呼び、子弟関係を結ぶ。それゆえ、同じ幕下の力士でもさらに仕事は分担され、入門年数が短い力士の方がより大変であったり、面倒である仕事を任せられてしまうそうだ。従って我々は入門年数が長い力士になればなるほど自分が担当する雑務の量は減り、より多くの自分の時間が持てるようになるのである。

このように年功序列が働く部屋において、雑務を分担しながら力士たちは１つ屋根の下集団生活を営んでいく。力士にとってこのような生活を積み重ねていけばいくほど、指導が厳しい親方は父親代わりに、その精神的フォローをするおかみさんはお母さん代わりに、そして兄弟子はお兄さん・弟弟子は弟といったような役割を果たすようになり、まるで１つの部屋が１つの家族のような関係、すなわち擬似家族関係になっていくのである。

まとめると相撲部屋は年功序列が働く集団生活であり、それを積み重ねていくと擬似関係が生まれる場所であると言える。

(2) 部屋の運営を円滑に維持する要因

ｉ．幕下（取的力士）の役割

一見「角界」というと、我々一般人にしてみると横綱・大関など名の知れ渡った幕内力士ばかりに目がいってしまいがちではないだろうか。けれども、インタビューを進めていくうちに、我々は部屋での生活上の仕事の分担などから、異なる役割を果たしている２タイプの力士の存在を発見し、目立ちがちである名の知れている力士よりも他方のタイプの力士の存在が部屋の運営、存続に関して重要であると考えるようになった。その２つのタイプの力士とはすなわち、１つは角界において相撲という興行を盛り上げる役割を担っている番付が上位の強い力士（いわゆる関取）。そしてもう１つは彼らがよりよい相撲を取れるよう雑務等を行い彼らの生活を支える役割を担っている番付が幕下下位の力士（いわゆる取的）である。この彼ら取的の存在が部屋には大きな影響を与えている。

まずは、幕下力士がどのような雑務を担当し、執り行うことで幕内力士を支えているのか彼らの具体的な仕事内容をみていきたいと思う。

彼らの主な仕事分担内容は以下の通りである。

- ちゃんこ番
- 掃除
- 風呂いれ
- お給仕/片付け
- ドロ着洗濯
- 稽古中のタオル持ち

ではここで、１つずつ具体的仕事内容について順にみてみる。

まずは、ちゃんこ番について。角界においてちゃんことは、我々が一般に想像するお鍋だけではなく、食事全般をさす。よって、ちゃんこ番とは昼、夜の食事の準備をする人たちのことである。部屋によって多少の違いはありそうだが、我々がインタビューした部屋の方によると、ちゃんこ番は幕下の力士たちが３～４人ずつでグループを作り、そのグループで当番制になっているという。また、各部屋には数個存在するちゃんこ番のグループを取りまとめるちゃんこ番長という人が存在するらしい。

掃除当番は、主に朝の稽古前と稽古後の午後４時頃の１日２回、掃除を行うらしい。朝の掃除当番は序の口、序二段、三段の力士達。彼らは稽古土俵のすぐ横にある畳の部屋で就寝している為、誰よりも早く起床し、稽古場の砂をならし、稽古のできる状態にするという。そして午後４時の掃除には、普段の生活として利用している部屋を清掃しているようである。

風呂入れは、単にお風呂を洗い、沸かすのはもちろんのこと、先輩力士達の体を流すところまでが仕事となるようである。

お給仕、後片付けは食事の際の当番である。部屋での食事はまずは親方、幕内力士、そして最後に幕下力士という番付順で食べる決まりになっている。番付が下位の力士が上位の力士が食事をしている際にその食事をしている力士の周りを取り囲み、お代わり等のお

手伝いをするようになっているようだ。そのお給仕が終了後に幕下力士達が食事をとり、後片付けをするのである。
ドロ着洗濯は幕下の力士の中でも特に入門してまだ間もない力士が行う仕事だそうだ。ドロ着とは、稽古が終了し砂と汗でまみれた体の上からはおる浴衣のことで、入門浅い力士達はこの汚れたドロ着を洗濯しなければならない。そのため、浴衣のたたみ方というの
彼らはこのような仕事を通じて部屋での力士たち自身の生活を支えているのだ。
またさらに、同じ幕下力士同士でも相撲部屋においては入門年数による「年功序列」が働いているため、同じ幕下の力士でもさらに仕事は分担され、入門年数が短い力士の方がより大変で面倒な仕事を任せられるのである。その一例としてA力士に尋ねてみると、「稽古前にまわしをまわし小屋から出す仕事、稽古場をならす仕事、力士の稽古中のタオル番、ドロ着の片付けなどでしょうか」という回答を頂いた。さらに、B力士にも同様の事を尋ねたところ、B力士の所属する部屋に居る比較的入門年数が長い取的は「あまり雑務はしないのですよ。」という回答も頂いた。従って入門年数が長い力士になればなるほど自分が担当する雑務の量は減り、より多くの自分の時間が持てるようになるのではないかと考える。
幕内の中でもさらに上の番付を目指し、幕下の力士が幕内を目指すように、それぞれがより強い力士となり上位の番付を目指すためには、より質のよい練習をし、より洗練された体を作り上げることが必要であり、そのためにはよりよい練習環境・生活環境が不可欠であると考える。その実現のため、雑務をとり行い支えているのが、幕下力士なのである。彼らがいなければ部屋は成り立てないし、実際入門者数が少ない、もしくは幕下力士が少ない部屋は生活や練習の面で支障がでてしまっているという話も聞く。
ゆえに、我々は部屋が上手く運営し維持し続けられているのは、目立つ盛り上げ役であり、角界の維持に大きな役割をしていると思われがちな幕内力士ではなく、さらにその彼らを支えている取的の存在が潜在的に大きな役割を果たしているのではないかと考えるようになったのである。

ⅱ．幕下力士（取的）の存在
我々は前節より、部屋を雑務等を通じて支えている力士が部屋の維持に重要な役割を果たしているのではないか、と考えるようになった。そして、その幕下力士に焦点を当ててさらに調べを進めていった。すると我々は普通のプロスポーツでは存在しえないタイプの力士を発見した。彼らは試合において好成績を収められないでいるが為に、幕下の番付が長期に渡って下位であるにも関わらず、相撲部屋にそして角界に居続けているという点で異なる。普通のプロスポーツ界は、弱肉強食の世界と言われ、良いプレーができなくなってしまったり、試合で好成績を納めず、強くなくなってしまった段階でその世界を解雇されるかもしくは引退するのが常ではないであろうか。けれども角界にはそのような状況にある力士が存在するのである。
このように普通のプロスポーツでは存在しえない、番付が下位の時代を長く積み重ねて

いる力士を角界では「古参力士」と呼んでいる。我々はフィールドワークを進めていくうちに、彼ら「古参力士」の役割が、部屋のマネジメント・存続に大きな役割を果たしているということが分かった。

(3) 古参力士が存在できる理由

では何故、相撲界では普通のプロスポーツ界では存在しえない「古参力士」という、好成績を納めずして幕下で長く居続ける力士が存在しうるのであろうか。その理由として我々は角界の原則・規則と角界の慣習が大きく影響をあたえているのではないかと考える。

そもそも、弱くして長く居続けられるということは、「現役を辞める」という行為を行わないことであり、「辞める」という行為が生じるには「他人から言われるという受動的理由」と「自分から辞意を表明する自発的理由」とがあると考える。すなわち「古参力士」が存在するのは辞める必要もなければ、辞めたいとも力士自身が思わないからではないだろうか。

ではまず、なぜ角界において受動的要因によって辞める可能性が低いのか見ていこう。その要因の可能性を低めているのは、しかるべき理由以外は角界において原則的に「解雇」という制度が存在しないということである。これは、普通のプロスポーツ界では有り得ないといっても過言ではないくらい、驚くべき事実である。

> 部屋は集団生活だから雑務を執り行う人もいないと運営できないのだよ。自分より番付が下の弱い力士が居てくれたほうが、安心感を持って稽古に打ち込め、モチベーションを高く保てるのだよ。だから団体生活には弱い人も必要なのだよ[11]。

角界において「解雇がない」というのは、年齢が高いのに番付が低い、言わば弱い力士であっても、相撲部屋における集団生活の中に必要な役割があるからであると考えられる。

以上からまず「原則的に解雇がない」という規則によって受動的要因によって辞める可能性が低められていると言えよう。

それでは次に能動的要因によって辞める可能性が低い理由を明かしていこう。こちらの要因には部屋の慣習が大きな役割を果たしている。繰り返すが、部屋は力士が集団生活を営み精進していく場所であり、年功序列が働き、それゆえに人々の関係が擬似家族的な関係となっていくのである。

このような擬似家族関係は年を重ねるごとに深まっていくものである。それゆえ力士は部屋に長く居れば居るほど自分の所属している部屋が自分にとっていごこちの良い場所となり、さらには辞めるきっかけを失うのではないかと推測する。

また次章で詳しく見ていくが、インタビューによって部屋に長く居続ける「古参力士」だからこそ成しえる役割というものが彼らに与えられたり、見出せるようになるために、

[11] Dさんへのヒアリングより。

例え番付では下位でも決して臆することもなく部屋に居座れるとも考える。
　以上、「集団生活」「年功序列」「擬似家族関係」という部屋ならではの慣習があいまって能動的要因の可能性を低めており、我々はこのようにして「古参力士」は生まれ、そして存在できると考えた。

(4) 相撲部屋における古参力士ならではの役割

　ここからは実際に「古参力士」はどのような役割を果たし、部屋のマネジメントや存続に影響を与えているのかを見ていこう。

【発見事実１】
古参力士は、相撲部屋において他の力士におごりを出させない役割を担っている。

　これは、番付が下の先輩がいるということが、力士をおごり高ぶらせないということである。一般的に考えて、角界に限らず年功序列が厳しい社会において下の者が上の者に対して礼儀（敬意）を払うのは当然のことである。従って、たとえ番付を越されてしまったとしても、もともとあった上下関係が崩れるということはない。これは、学生時代の部活を考えても明らかであろう。レギュラーであろうがなかろうが先輩は先輩、後輩は後輩である。通常、人は地位が上へ行けば行くほどおごりが出るものである。しかしこの厳しい上下関係が、地位が上がれば上がるほどおごりがでてくるという状況に歯止めをかけているのである。
　実際、両国で行ったフィールドワークの最中でも上下関係がしっかりと守られている場面を数多く見ることができた。力士同士の会話の中では、番付が上であっても、兄弟子（先輩）に対する言葉遣い、気の使い方からも敬意を払っているということが窺われた。その中でも「古参力士」は自分より番付が上の後輩がたくさんいる。そこから「古参力士」は、他の力士におごりをださせないということに大きな役割を果たしているということができる。

【発見事実２】
古参力士は、相撲部屋において雑用指導・マネジメントと面で部屋の運営を支える役割を担っている。

　次に「古参力士」が部屋の運営を支えている役割を果たしているということを明らかにしていく。我々はこれらの役割を明らかにするに当たってＢさんほか数名の力士、Ｄさんへのインタビューを敢行した。
　まずは、「雑用指導」という役割を見ていこう。新人幕下力士に「長く幕下をやっている力士に教わること」を伺った。彼らは口を揃えて「あいさつ、基礎練習、幕下がやる雑務

の指導」と答えてくれた。長くいるから知識・指導力は１番まさっているのではないかという話を伺うこともできた。また、「古参力士」はいい励まし役にもなっているそうだ。ご存知の通り、角界での生活は厳しい。朝から晩まで厳しい上下関係の中での共同生活だけでも大変であるはずなのに、それに加えて食事当番、掃除当番、厳しい稽古の連続である。何度も辞めたい、いっそのこと部屋から逃げてしまいたいと思ったそうだ。また、そのように思う力士は少なくないと伺った。そんな時、周りの人や親族の支えはもちろんであるが、「古参力士」の果たす役割は大きい。彼らに「俺も最初は毎日泣いてたよ、でも頑張れ」と言ってもらえた時は随分と励まされたそうだ。実際に同じ気持ちを経験して現在まで頑張れている立場の人間の言葉というものはやはり重みがあるのだろう。

しかし、必ずしも新人力士は古参力士の存在をよくは思っていないということも分かった。なかには、「口が悪いし、厳しい。正直、口うるさいくせに特になにもしないから部屋にいらないんじゃないか。」という驚くべき声も聞くことができた。

この言葉は本研究において重要な証言である。我々はインタビュー当初多く聞くことが出来た「古参力士」は「いろいろなことを教えてくれて、励ましてくれるいい先輩」であるという意見を参考に「古参力士」の役割をそこまでだと考えていた。つまり、後輩を励まし指導を担う役割である。しかし、「怖くて厳しくて部屋にはいてほしくない」という意見も考察してみると新たな疑問が浮かんできた。下から（後輩）は嫌がられている先輩、必要ではないとまで言われてしまった先輩は上から（親方）からはどう思われているのだろうか、という疑問である。そこで、D さんにも話を伺うことにした。

最初に聞いた質問は「親方から見た部屋にとっての古参力士の役割は何ですか」というものである。この質問に対し、D さんは「力士と親方をつなぐ役割」、「親方の手伝い」と答えてくださった。「力士と親方をつなぐ役割」として場所後最初の稽古の日程決め、又、地方場所に行く際の先発隊のチケットの手配などマネージャー的な役割を果たしていた。「親方の手伝い」という面では親方のスケジュール管理等も行うそうだ。また、そのままマネージャーとして引退後も親方の下で働くこともある。親方の言葉で印象的だったものは「若い親方よりも古参力士のほうが使いやすい」というものであった。そこから「古参力士」は長く親方の下にいるため、親方との絶大なる信頼関係ができあがっているということが窺える。また、対下へ（新人力士）の役割より対上へ（親方）の役割のほうが大きいということも分かる。

以上より、「古参力士」は、部屋の運営面を支え、マネジメントをする役割を果たしているということができる。

【発見事実３】

古参力士は、相撲部屋において他の力士のモチベーションを上げさせる役割を担っている。

最後に「古参力士」が他の力士のモチベーションを上げる役割を果たしているというこ

とを明らかにしていく。これは、T親方の言葉から明らかになったことである。

部屋での「古参力士」の役割を伺っているうちに、面白い話を聞くことができた。なんと「古参力士」の存在は仲間のモチベーションを上げる役割を果たしているというのだ。それはムードメーカーという意味ではない。では、どんな意味なのだろうか。

相撲という競技は個人競技であり、勝敗で自分の番付が変わってくる。一場所一場所が昇退進のかかった大事な戦いなのである。しかし、毎場所思うように勝てるわけではない。負けが続くと力士のモチベーションはどんどん下がり、腐ってしまい、とことん番付が落ちてしまうということもありえる。負けが続くそして腐る、また負けてしまいさらに腐る、という悪循環が起き力士がダメになってしまう。それを防ぐのが「古参力士」の存在なのである。負けが続いてしまうことがあっても、部屋に自分より長くいるのに番付が下の力士がいれば、自分が上の番付に上がった後に落ちてきた場合の安心材料・ふんばる力となり、自信を持たせることができるというのである。仮に、自分より弱い力士がいなければ歯止めなく落ちていくというわけである。

以上の理由から「古参力士」は他の力士のやる気を損なわせない、モチベーションを保つ役割を果たしているということができる。

(5) 古参力士の存在が「部屋の維持」につながる理由についての考察

これまでの議論より、３つの事実が確認された。１つ目は古参力士が相撲部屋において他の力士におごりを出させない役割を担っているという事実、２つ目は古参力士が相撲部屋において雑用指導・マネジメントと面で部屋の運営を支える役割を担っているという事実、そして最後は古参力士が相撲部屋において他の力士のモチベーションを上げさせる役割を担っているという事実である。

ではこれらの役割が、どのように部屋の維持に作用しているのであろうか。以下順に見ていこう。

ⅰ．番付が下の先輩がいるということでおごりを出させないという役割は、力士が誰に対しても礼儀をもって接するようにするようになる、「礼儀」「礼節」を守り、部屋の風土を変化させることなく、維持することにつながると考える。

ⅱ．部屋の生活を支えている（雑務）の役割は、集団生活の規律等を変わらず守らせていき、さらには部屋が円滑に機能するということにつながると考える。

ⅲ．他の力士のモチベーションを上げる・保つ役割は、自分より下の番付の人が存在するということが、精神的な安心材料となり、稽古のやる気を失わせない。また、モチベーション高く稽古に励み続ける原動力となりえるということにつながる。したがって、稽古自体の質・雰囲気の低下を防ぐことができると考える。

以上より「古参力士」という独自の役割を持つ力士の存在によって、部屋は「礼儀」「礼

節」を守り続けることが出来、なおかつ部屋の風土さらには規則等をも変化させることなく、部屋自体を円滑に運営し維持することができるのである。さらに、他の力士のモチベーションを上げ、稽古の質を下げないことで継続的に上質な稽古を可能にし、このこともまた部屋の円滑な運営に繋がると考える。角界において最も重要であると考えられる部屋が継続的に円滑に運営でき、変わらずに存続できるということは、すなわち角界という１つの世界自身も大きな変化を伴うことなく存続し続けていると言えよう。

一方、稽古の質を下げないということは部屋の目標である「番付が上位の強い力士を輩出する」ということに繋がり、そして番付が上位の力士が多数輩出されると、大相撲という興行自体が活気を帯び盛り上がるため、観客も増加し角界の財政も豊かになり、角界自体の存続維持にも繋がると我々は考えた。

このように「古参力士」の存在は部屋の存続維持、しいては角界全体の存続維持に大きな役割を果たしており、角界が 250 年もの長い期間存続できたのもこの「古参力士」の存在あってこそなのである。角界において彼ら「古参力士」はなくてはならない存在なのだ。

6. まとめ

我々のこの研究の目的は、角界の存続理由を部屋の維持という点に焦点をあてて明らかにすることであった。

調査と機能分析の結果、部屋の維持には「古参力士」の存在・役割こそが鍵となるということが分かった。「古参力士」、すなわち好成績を長期に渡って納められない選手の存在は、スポーツ界にとって異質な存在である。一般的にスポーツ界では他の人よりその競技の能力が優れていないとどんどん排除されてしまう。しかし、角界においては角界特有の仕組みである寝食稽古全ての面において「集団生活」「年功序列」「擬似家族関係」「解雇がない」といった角界独自の慣習や慣行から「古参力士」が生み出されるのだ。というのも、集団生活をすることにより、年功序列が厳しく守られ、また擬似家族化するという状況になる。擬似家族化してしまうと、相撲の強い弱いだけで簡単に部屋を辞めることが出来なくなり、またそれだけで親方から評価されることがないため興行を盛り上げる幕内力士と運営を支える幕下力士、（幕下力士の中でも核となる人物が「古参力士」）という２つのタイプの役割が存在することとなる。この「古参力士」の存在こそが部屋運営で重要な、他の力士におごりを出させない役割、雑用指導・マネジメントの面で部屋の運営を支える役割、他の力士のモチベーションを上げさせる役割を果たしているため「古参力士」が相撲部屋の維持の鍵、キーマンとなるのだ。

7.　あとがき

今回角界を研究するにあたり研究前、我々は角界という場所はとても敷居が高く研究しづらいのではないかと思っていた。しかし、部屋での朝稽古は非常識でない限り見学自由であり、実際我々が見学に行った際も国籍を問わずたくさんの方が見学をしていた。また、力士の方々も稽古後の突然のインタビューや場所後の路上でのインタビューにも嫌な顔一つせずに快く答えてくださり我々は大変感謝している。場所中にはたくさんのファンの方々の声援にこたえている姿や、写真撮影に気軽に応じている姿も多く見受けられ本当に誰に対しても平等に親切であるということを実感することがきた。これは、どのスポーツよりも礼節を重んじる相撲だからこそだからではないだろうか。さらに、相撲協会の広報の方、親方までもが我々のような学生の質問にも丁寧に答えてくださり、彼らの協力なしではこの論文を書くことができなかったということを明記しておきたい。

インタビューをするにあたり勉強不足で失礼なことも多々あったかと思うが、温かく対応してくださり大変感謝している。これからも「相撲らしさ」「礼節」の心を大切に相撲に励んでいっていただきたいと感じた。

最後に、親方、力士そして協会広報の方々、本当にありがとうございました。

参考文献

▼ 書籍

中島隆信（2003）『大相撲の経済学』東洋経済新報社.

真石博之（2000）『「うっちゃり」はなぜ消えたのか』日本経済新聞社.

松田忠徳（2006）『大相撲　大変』祥伝社.

大見信昭（2007）『大相撲界の真相』河出書房新社.

横綱千代の富士（1991）『わたしはかく闘った』日本放送出版協会.

旭鷲山昇（2000）『土俵の上から見た不思議なニッポン人』扶桑社.

中澤嗣子（2004）『相撲部屋２４時おかみさん奮闘記』講談社＋α.

工藤隆一（2007）『力士はなぜ四股を踏むのか？－大相撲の「なぜ？」がすべてわかる本』日東書院本社.

風見明（2002）『相撲、国技となる』大修館書店.

新田一郎（1994）『相撲の歴史』山川出版社.

池田雅雄（1990）『大相撲ものしり帳』ベースボール・マガジン社.

小島貞二（1992）『相撲史うらおもて』ベースボール・マガジン社.

尾川真己（2002）『相撲一途』自費出版.

雑誌（1996）『大相撲』読売新聞社.

加護野忠男（2005）『プレジデント』相撲部屋の「人事・報酬制度」に学べ 2005 年 10.3 号.

加護野忠男（1988）『組織認識論』千倉書房.

佐藤郁哉（1992）『フィールドワーク―書を持って街へ出よう』新曜社.

佐藤郁哉（2002）『フィールドワークの技法―問いを育てる、仮説をきたえる』新曜社.

小池和男（2000）『聞き取りの作法』東洋新聞新報社.

▼ 論文

加護野忠男（2007）「取引の文化：地域産業の制度的叡智」『国民経済雑誌』第 196 巻 第 1 号.

西尾久美子（2006）『伝統文化産業の事業システム―花街の事例―』神戸大学経営学研究科 Discussion paper　//2006. 28

Robert King Merton (1949) "*Social Theory and Social Structure: Toward the Codification of Theory and Research*", (Free Press, 1949).

▼ ウェブサイト

「日本相撲協会公式ホームページ」（http://www.sumo.or.jp/）
「ビデオリサーチ」（http://www.videor.co.jp/data/ratedata/r_index.htm）

Appendix

角界の基礎事項

ｉ．相撲部屋

【部屋の役割】

部屋の役割とは、角界の重要な要素である力士を育成するということである。力士は部屋間の移籍は禁じられており、入門以降、引退するまで同じ部屋で寝食を共にし、集団生活を営みながら日々精進する。

【部屋の最終目標】

部屋の目標はより強い力士を育成し、輩出することである。強い力士とは番付が上位であるということである。それは、主な部屋の運営資金とされている協会からの補助金制度を見れば明らかである。

【部屋の運営資金】

部屋の運営資金は協会から支給される補助金制度によってなりたっている。この補助金制度は強い力士、すなわち番付が上位の力士を輩出するほどインセンティブが与えられているしくみとなっている。

表Ａ　角界の補助金制度

補助金制度

①部屋維持制度　弟子1人につき　115，000円/1場所

②稽古場経費　　弟子1人につき　45，000円/1場所

③力士養成費　　幕下以下の力士1人につき　70，000円/月

④養成奨励金　　階級が上がるごとに増える仕組み

十両1人につき114万円/年

平幕1人につき126万円/年

三役　　156万円

大関　　216万円

横綱　　276万円

『 大相撲の経済学　P75より抜粋』

ⅱ．財団法人日本相撲協会

【協会の意義・役割】

協会の意義としては、「日本の国技である相撲の発展維持と国民の心身の向上に寄与すること」であり、その基本的な役割としては、協会のもつ大相撲を独占的に興行することができる営業権を行使して１年間に６回の本場所[12]を挙行することである。ゆえにその為に必要な施設は協会によって運営されており、規則も協会の理事会によって定められる。また、番付などの角界の人事を執り行うのも協会の役割だ。よって、大相撲という興業を挙行するために必要な権限を全て握っているのがこの協会であるといえよう。

【協会の構成員】

協会の構成員は、年寄名跡[13]を襲名継承した元力士達である。よって、協会は元力士達によって運営され、継続してきており、決して外部の人間を入れることのない閉ざされた組織であるといえよう。

【協会の収入源】

協会の収入は、本場所収入[14]と巡業収入[15]、すなわち興行収入によって成り立っている。その割合としては、前者が３分の２を占め、後者が残りの３分の１といった配分となっている。そこで得た興行収入を、部屋の説明で述べた部屋の主な運営資金となっている補助金として支給しているのだ。また、構成員の給与も興行収入から支給されている。このように、協会は部屋に育成費や運営費を支給しているが、力士の育成については、親方に全てを委ねており、協会が関与することはない。また協会は、関取には月給や賞与、場所手当[16]、給金制度[17]など様々な待遇を施しているのに対し、取的には場所手当や給金制度のみといった力士個人にもより強くなるほど多くのインセンティブを与えている。

ⅲ．相撲茶屋

【茶屋の役割】

---

[12] 一月場所、三月場所、五月場所、七月場所、九月場所、十一月場所が各 15 日間行われる。

[13] 別称「年寄株」現役を引退した力士が協会に残るためや、親方になるために、これを取得しなければならない。

[14] その名の通り本場所の興行で得られる収入。年間の本場所収入は 104 億円（平成 11 年度）。１場所 15 日が年に六回なので年間 90 日。本場所一日当たりの売上は約 1 億 2000 万円にものぼる。

[15] 興行をするための営業権を地方の団体に委託して行われる巡業で得られる収入。年間 25 億円（平成１１年度）

[16] 横綱 273 万円、大関 227 万円、関脇・小結 164 万円、平幕 127 万円、十両 100 万円。

[17] 現在の正式名称「力士褒賞金」。持ち給金×4000 倍勝ち越せば給金は上がり、負け越しても下がらない温かみのある制度。ちなみにトリテキ時代は計算されるだけで実際に支給されるのは関取になってから。

茶屋は、大相撲チケットのプレイガイドであり、協会から本場所の桝席[18]入場券の流通をあずかり、委託された入場券を見物客に売りさばく役割を果たしている。茶屋が協会から全ての升席が委託されるわけではなく、国技館の桝席（5800 席）のうち茶屋経由で売られる分が 70%～80%とされており、またその協会から茶屋への卸値は定価の９掛けといわれている。茶屋が扱う桝席の多くは年間通しで使う得意先[19]に売られるが、その一部は茶屋と縁の深い部屋に割り当てられ、後援会員の手に渡るという。

さらに茶屋は、桝席の手配のみならず、相撲を見る際の飲食やお土産の手配などのサービスを提供している。昔ならではの大相撲見学をするにはこの茶屋を通じてチケットを手配し、升席見学するのが１番よいのではないか。

ⅳ．後援会・タニマチ

【後援会・タニマチの役割】

後援会とタニマチは部屋や力士を金銭・物資面で支援する役割を担っている。部屋や力士は協会から支給されている育成費や給金だけでなく、後援会やタニマチといった贔屓筋からも支えられて成り立っているのである。

【後援会とタニマチの違い】

まず後援会とは、年に数万円単位の後援会費[20]を払い、集団で部屋を支援する団体である。後援会に入ることで見返りとして、部屋から特典[21]が与えられる。この特典の一例として、桝席への招待が挙げられる。これには、部屋経由で茶屋から後援会へ桝席チケットが渡り、後援会員が相撲を見ることで力士もがんばれるし、後援会ももっと応援しようという循環が生まれる。

一方、タニマチ[22]とは、力士個人をサポートする贔屓筋のことであり、後援会とは異なり、強くなってほしいとの願いから無償で支援している。例えば、力士にご飯を食べさせに連れていっていたり、地方場所の場合長年にわたり部屋と付き合いのあるタニマチが親方や関取のために自分の家を宿舎として提供してくれたり、食材の差し入れをしてくれたりするという。元力士の証言によると、力士はタニマチの方々のおかげで、人とのお付き合いを教わり、引退後も一般社会で生活できるように助けてもらっているという。

---

[18] 座布団が敷かれた四角いスペースの上に４人一組みで座る席。土俵の近くで観戦することができなおかつ、飲食の可能。今では、２人用の席もある。ちなみに一番土俵から近い席は、たまり席といってここは、飲食はおろか、大声で応援することも許されない通のための席。入手困難。

[19] 企業や団体が多い。

[20] 値段によって階層わけしたりしている。ある部屋を例に挙げてみると、前頭会員１万、小結会員３万、関脇会員５万、大関会員 10 万というように分かれている。

[21] 前頭会員には番付・カレンダーなど、小結会員には前頭会員特典・千秋楽パーティー１枚・直前稽古見学会チケット１枚、関脇会員には上記に加えパーティー招待券・見学会のチケット（３枚）・部屋のオリジナル記念品、大関会員には上記に加え、たまり席および桝席ご招待・千秋楽パーティー・直前稽古見学会チケット（６枚）。

[22] たいていは、地主や企業の社長など。

Photo Album

まさか直接お話伺えるとは思いませんでした。高砂元広報部長と。

朝稽古の様子。

朝稽古後のテーピング等をはずす時間。
主にこの時間にインタビューさせていただきました。

力士の方々は皆気さくで温かい方でした。ありがとうございました！